

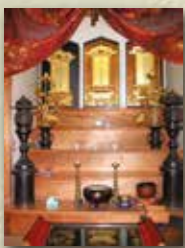
# 腕塚堂（忠度塚）

源平一の谷合戦のとき、平忠度は一の谷陣の大將でしたが、敗れて駒ヶ林指して落ち行く途中、源氏の武將岡部六弥太忠澄と戦い、忠澄の家臣に右腕を切り落とされてしまいました。忠度はついに観念し、静かに念仏して討たれ、その籠（えびら：矢を入れ背負う道具）には



写真は震災前の地蔵盆の様子

行きくれて  
木の下かげを宿とせば  
花やこよひの主ならまし



平忠度を祀る祠

という歌が書かれた紙片がむすばれていたといわれています。この腕塚は忠度の切り落とされた腕を埋めた所と伝えられ、参拝すると腕や腰や足の痛みがなおると人々から信仰されています。

# 各地に残る忠度の碑

## 忠度塚

- 兵庫県明石市天文町2丁目
- 山陽電車「人丸駅」より徒歩約7分
- 忠度の亡骸を埋葬したとされている場所です。以前ここは町名が忠度町とつけられていました。

## 胴塚（首塚）

- 兵庫県神戸市長田区野田町8丁目
- 地下鉄「駒ヶ林駅」より徒歩約10分
- 忠度の胴体が埋められたとされおり、目や頭等、首から上の病が治ると信仰されています。

## 腕塚

- 兵庫県明石市天文町1丁目
- 山陽電車「人丸駅」より徒歩約7分
- 明石市にある腕塚神社です。以前ここは右手塚（うでつか）町と言ったそうです。

## 忠度の供養塔

- 埼玉県深谷市大字置場
- JR高崎線「深谷駅」より徒歩18分
- 岡部六弥太は忠度を弔うため、領地の中で最も景色の良いこの地に供養塔を建てたそうです。

## 平忠度歌碑

- 滋賀県大津市小開町1丁目
- 京阪京津線「上栄町駅」より徒歩5分
- 「さざ浪や志賀の都は・・・」と詠んだ和歌の石碑が長等公園の桜が丘にあります。

## 平忠度歌碑

- 福岡県北九州市門司区大里戸ノ上1丁目
- JR「門司港駅」より徒歩10分
- 「都なる九重の内恋しくは・・・」と都を偲んで詠んだ和歌が御所境内にあります。

# 駒ヶ林の位置図



## 駒ヶ林までのアクセス

- 最寄り駅  
地下鉄海岸線「駒ヶ林駅」
- 駒ヶ林まで  
地下鉄海岸線「三宮・花時計前」から電車で15分  
地下鉄海岸線「新長田駅」から電車で1分  
JR「新長田駅」から徒歩10分

# 駒ヶ林まちづくり協議会



駒ヶ林まちづくり協議会では、地域の歴史を伝え、未来につなげるために、様々な様活動をしています。この「駒っぶ第三弾『義経記念号』」もその活動の一環として作成しました。

## 駒ヶ林まちづくり協議会のメンバー

中本 正	北村 美代子	面出 輝男
小畑 徳江	浦井 清五	小林 昌彦
辰巳 昭子	美濃 逸子	紺社 昭三
山口 敬一	宮崎 竹生	俊成 公司
浜田 正和	岡田 隆義	中西 巖
今井 房子		

発行：駒ヶ林まちづくり協議会

# 駒っぶ第三弾

# 『義経』記念号



※屏風は「源平合戦図屏風一の谷・屋島合戦図」（神戸市立博物館蔵）  
銅像は関門市「みもすそ川公園」の義経像

# 駒ヶ林と源平の合戦

寿永二年（1182）四月、木曾義仲の入洛により、平氏は都落ちし、四国の屋島に本拠地を構えることになりました。そこで挽回を狙い、山陽道、南海道から十万余騎にのぼる軍勢を播磨国と摂津国の国境にある一の谷に集結させたのです。ここに設けられた「一の谷の砦」は、一の谷を西の、生田の森を東の城戸口とした東西約三里ほどの砦で、北は六甲の山々に囲まれ、南は海に守られた、まさに要害の地といえる砦でした。古くから漁港として栄えた駒ヶ林は、まさにこの砦の南の端に位置したのです。そして寿永三年（1183）一月二十六日、法皇から源義経・範頼に平氏追討の院宣が下ります。都を出発した源氏は、その兵を二手に分けます。ひとつは西国街道を西進する総勢五万六千余騎の範頼の大手軍で、東の城戸口・生田の森を攻める手筈です。もうひとつは義経が率いる二万余騎の搦め手軍。こちらは播磨の三木に向かって進軍します。途中、平氏の軍勢を破りながら、さらに西の城戸口を攻める軍勢を分け、義経自身は子飼いの郎党七十騎を率いて高尾山から鶴越へ向かいます。二月七日午前、遂に一の谷の決戦の火蓋が切られます。当初均衡していた戦いも、義経の「鶴越の逆落とし」の奇襲により、背後から打撃を受けた平氏は総崩れとなり、源氏軍に追われ海へと向い、浜から船に我先に乗り込んで逃げたと言われます。義経による平氏討伐の第一戦。そして平氏滅亡の序章は、この駒ヶ林も舞台に繰り広げられたのです。

# 平家一門の花 平忠度



▲出典：賞月堂主人 玉蘭齋貞秀画  
「武家百人一首」  
(国文学研究資料館蔵)

- 平 忠度**（たいらのただのり）
- 天養元年(1144)生
  - 寿永三年(1184)二月七日没
  - 正四位下薩摩守
  - 平忠盛の子
  - 平清盛の末弟
  - 母は、丹後守藤原為忠女などと伝えるが未詳
  - 薩摩守、伯耆守、右衛門佐左兵衛佐を歴任

腕塚堂に祀られている平忠度は、忠盛の末子、清盛の末弟で、熊野に生まれ育ったと言われています。平家全盛時代には、反平氏勢力追討のため将軍として各地を転戦し、武勇の誉れ高かったのですが、歌人としても有名で、文武両道に秀でた平家一門の花といわれた武將でした。寿永二年（1182）都落ちで京を離れるときには勅勤（勅命による勘当）の身でありながら途中わざわざ引き返し、歌道で師事した藤原俊成の屋敷に赴き、将来自分の歌が勅撰集に選ばれることを願い、百余首一巻の巻物を残したという逸話が伝えられています。忠度の死後、後白河院の勅撰による「千載集」が編まれたとき、選者の俊成はそこから「さざ波や 志賀の都はあれにしを 昔ながらの山ざくらかな」という一首を載せましたが、作者は読み人知らずとされています。

# 源氏と平家家系図

